石巻専修大学特集

「石巻専修大学」ホームページ　https://www.senshu-u.ac.jp/ishinomaki/

30th 1989-2019 ISHINOMAKI SENSHU University

地域に根ざした教育を実践

自然豊かな環境のキャンパスで学んだことを、未来に生かす―

―創立30周年の石巻専修大学は、個人を重視した少人数教育、地域に根ざした実践的教育を行っている。特集では教員の研究や地域貢献活動、学生の就職状況やゼミ、研究活動を紹介する。

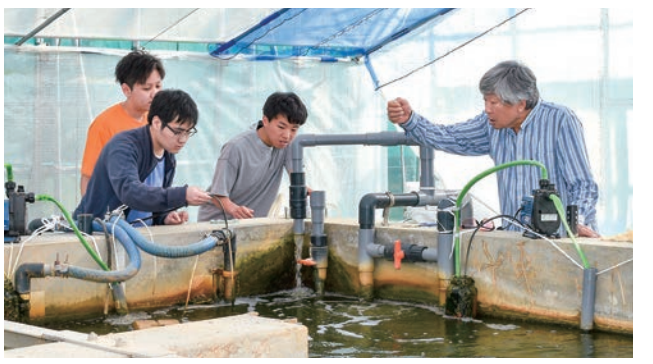
自然豊かな緑のキャンパス

学生食堂で談笑する学生

森・川・海の連携で養殖に挑戦

理工学部食環境学科　高崎教授

高崎みつる理工学部教授は、森・川・海の連携による水質環境の再生、新しい養殖業への挑戦を研究テーマとしている。体育館北側の大型実験水槽施設が、高崎教授のもう一つの〝研究室〟だ。魚の養殖に関する水質管理や浄化方法の確立、草や葉をベースにした安全な「えさ作り」など多岐にわたる研究に、学生たちと取り組む。



主水槽で学生とともに実験に取り組む高崎教授（右）

主水槽は、幅4㍍、長さ9㍍、深さ2㍍のコンクリート製。ドジョウが泳ぎ、タニシ、シジミが生息している。水量・水質制御を可能とする各種ポンプなどの機能を備え、独自の噴流の仕組みとシステムで、さまざまな環境を再現して行う実験が可能だ。外側は風雨や、鳥などの侵入を防ぐための大型パイプハウスで覆われている。

重要なえさ作りの基となる草はキャンパス脇を流れる旧北上川の土手に生えている菜の花、ヒメジョオンなどが使われる。

「周りには海も山もあり、すべてが研究の種になる。森羅万象に耳を傾け、恵まれたキャンパスの特性を研究に生かしたい」と高崎教授は語った。（2016年度の文部科学省私立大学研究ブランディング事業。現在は石巻専大の事業として展開中）

リボーンアートフェスに協力

経営学部経営学科　庄子ゼミ

自然を生かした作品の制作に協力するゼミ生＝４月19日

「観光まちづくり」を学ぶ経営学部の庄子真岐ゼミは、一般社団法人Reborn-Art Festival、宮城県石巻高校との高大産連携プロジェクト「リボーンアートプロジェクト」に取り組む。今夏開催される宮城県の牡鹿半島と石巻市街地を舞台にアート、音楽、食を楽しむ「リボーンアートフェスティバル（RAF）」の準備や調査を行っている。

３月からRAFの拠点施設の一つ「ものうらビレッジ」で芸術家・パルコキノシタさんの作品制作に協力。石巻高校新聞部と連携し、情報発信など認知度アップを行う。木村春輝さん（経営3・宮城県松島高）は「作品や地域の魅力を伝え、多くの人、特に若い人たちに参加してもらえるようなアイデアを考えていきたい」と話す。

庄子ゼミは経営、人間の2学部が所属する唯一のゼミ。遠藤なぎささん（人間3・宮城県石巻西高）は「活動を通して石巻の新たな魅力を知り、まちがより好きになった」と言う。庄子教授は「フィールドワークを重視しており、会場にも何度も足を運ぶ。さまざまなことにトライし、実践を通して地域への理解を深め、石巻が持つ本質的な価値を探ってほしい」と語る。

園児とかかわり技術を体得

「保育・教育研究」――人間学部人間教育学科――「初等教育実習事前事後指導」

人間学部人間教育学科の「保育・教育研究」では、入学したばかりの1年次生が石巻圏域の保育園、幼稚園、こども園のほか、小学校や特別支援学校などの教育現場を訪問し、保育・教育現場で必要な知識や技術を体得する。

矢本はなぶさ幼稚園で実習する学生＝５月27日

５月27日には2グループに分かれ、東松島市の「矢本はなぶさ幼稚園」と「矢本東保育所」を訪問した。合唱や運動、絵本の読み聞かせなど、学生たちは積極的に園児とかかわり、保育現場の現状や課題について理解を深めた。

矢本はなぶさ幼稚園を訪問した杉山諒さん（人間1・鹿児島県屋久島おおぞら高）は、「普段の講義だけでは学ぶことができない現場の現状について学習できる有意義な授業だ」と話す。

認定こども園への就職を希望している阿部未侑さん（人間1・宮城県石巻商高）は矢本東保育所で「ブロックのおもちゃを持って走り回る園児に対して、先生が『子どもに考えさせる注意の仕方』を示してくれたのは、とても勉強になった」と振り返り、「保育の仕事は子どもたちの命を預かる責任ある職業。しっかりと知識・技術を身につけたい」とこれからの学びに意欲を見せた。

学校現場の「いま」を知る

教員を志す学生にとって夏は教育実習の大切なシーズン。人間教育学科では5月28日、「初等教育実習事前事後指導」が行われ、石巻市立蛇田小学校の阿部清司校長を講師に学校現場の「いま」を学んだ。

現場の「いま」を話す阿部校長

「教育実習に向けて」をテーマに阿部校長は「大学であまり勉強しないことを話します」と前置き。防災・減災教育の推進▽いじめや不登校・被虐待児童への対応▽体罰などについて、学生たちが小学生だった10年前との変化を説明。「子どものよいところをほめ、分からないことは実習担当の先生に質問し、頑張ってください」と激励した。

熊谷拓哉さん（人間3・熊本県慶誠高）の実習先は母校の石巻市立釜小学校。「机間指導の際、ひざをついて目線を合わせ、休み時間に一緒に遊ぶなど、子どもの気持ちをくむ具体的な方法は勉強になった」と言う。熊本県玉名市で実習する前村拓弥さん（人間3・熊本県専大玉名高）は、「あいさつ、服装、スマホの使い方など教員が実習生をどう注視しているかを知った。児童からは先生と見られていることも分かり、心構えができた」と語った。